

第1回 令和の魅力と活力ある県立高校のあり方検討委員会 議事概要

1 日 時 令和3年8月31日(火) 13:00~14:45

2 場 所 富山県民会館701号室(各委員はオンラインによる参加)

3 委員出席者 伊東 潤一郎 稲田 裕彦 尾畑 納子
金岡 克己 河上 めぐみ 品川 祐一郎
白江 勉 白江 日呂雄 鈴木 真由美
須田 英克 堀井 鉄也 本江 孝一
牧田 和樹 本島 直美

4 会議の要旨

司会が開会を宣し、教育長が挨拶した。

(教育長)

委員の皆様方には、日頃より、本県教育の推進のために格別のお力添え、ご理解を賜っていること、そしてこの度、委員へのご就任を賜りましたこと、厚く御礼を申し上げます。

さて、高校教育に関する全国的な動きとして、来年度から高校における新しい学習指導要領が本格導入をされ、主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善による問題解決型学習の取り組みが、一層積極的に取り組まれることとなる。また、本年1月の中教審答申を受け、普通科において学際的な学びや地域社会に関する学びなどに重点的に取り組む学科の開設が可能になるなど、高校生の学習意欲を喚起し、生徒の可能性や努力、能力を最大限に伸ばすための各学校での魅力化、特色化が求められている。本県においても、AIやIoTなどの技術革新、また、グローバル化などが進展する中、地方創生の視点や生徒・保護者のニーズなどを考慮した県立高校のあり方について、10年後20年後の将来を見据えた議論を行って、対応急ぐ必要があると考えている。こうしたことから、社会の変化に対応する力を育成する課題解決型の教育やICT教育の推進、普通科・職業科の今後のあり方など、魅力と活力ある県立高校のあり方について、検討する必要があると考え、この委員会を設置した。

この会議は今年度中に3回の開催を予定しているが、これまでの取り組みや県立高校の現状を踏まえながら、様々なタイプの学科などの現状と今後のあり方、また普通科や職業科、総合学科の現状と今後のあり方などについて、ご検討をいただきたいと考えている。その検討にあたっては、予測困難な時代と言われる将来に対応できるよう、今後求められる資質や能力というのはどういったものなのか、そして、それをどう育成するのかといった視点。また、生徒・保護者のニーズや、地方創生の視点も踏まえた魅力ある県立高校はどのようなものなのかといった視点。こういった視点・観点から、多面的な角度からご検討をいただきたいと考えている。

組織運営事項（委員長の互選、副委員長の指名）

司会から、議事に先立ち、令和の魅力と活力ある県立高校のあり方検討委員会設置要綱第4条第2項の規定により委員長を互選していただく必要がある旨を説明し、委員に諮ったところ、金岡委員を推挙する発言があり、全員異議なく、金岡委員を委員長に選出した。

金岡委員長の就任挨拶の後、同要綱第4条第2項の規定により、金岡委員長が牧田委員を副委員長に指名し、以後の議事については同要綱第4条第3項および第5条第1項の規定により、委員長が進行した。

議事事項

○ 将来展望に立った県立高校のあり方について

事務局から資料に基づき、本会における検討事項の確認と検討に当たって参考とする事柄などについて説明した。

（委員長）

県立高校のあり方について皆様のこれまでの経験を踏まえた知見を、お一人4分程度でご発言いただきたい。

（委員）

富山県の県立高校、特に職業科の子ども達がしっかりと育ってくるということは大変大切なことであり、そういう子ども達が地元企業に就職して、しっかり頑張っていただけのことでは大切であると思っている。

これからの時代を生きる子ども達の資質には、ここ最近就職してくる子ども達を見ていて、問題発見をする能力がどんどん低下してきていることを強く感じている。

生きる力に対しては問題解決能力ということを言われるが、問題を解決する能力の前に、問題があるということに対して、どう気づいていくのかという資質や能力を学ぶ機会が必要と感じている。

子ども達が問題発見するために気づく力というものを、もっとつけていかなければならない。生きる力をつける前の段階として、そういう力が必要だということを、高校教育、学校の教育の中でやっていただければありがたい。

地域との連携や地域産業界を支える人材の育成という話であるが、我々はものづくりの製造業をしているが、学校で、例えば一つの機械の使い方などだが、いろいろなことを先生方はいろいろ苦勞して教えていただいていると思うが、実際のところ、今、社会でものづくりをやっているレベルと学校でこれを学んで来るレベルに大きな差があることに気づいてもらいたい。特に職業科の人材育成においては、非常に強く感じている。そういう中で、子ども達を育てる視点はすごく大事だが、先生方に気づいてもらう機会をもっと増やしていかないといけないと感じている。先生方が今社会で求められていることなどが、一体どういうものかを学んでいただき、その学んだ結果として子どもを育てるといった視点になっていくことが大切であると

思う。

産業界をもっともっと活用していただきたいと感じている。数年前に愛知県立愛知総合工科高等学校を見学させていただいたが、工業の実習で、実際に教えていらっしゃる方は、いろいろな企業の技能オリンピックに出られたような方が子ども達に教えているということを知った。もう少し、学校の教育の中で、我々のような産業界をもっと活用していく必要があると感じている。

(委員)

資質がどうあるべきかというところにおいては、やはり生きる力というか、気づく力というものがあるかもしれないが、それをどうやって発動していくか、その辺の表現力をどうするのかということだ。おとなしい人が増えてきたことは間違いないと思う。

教育の仕組みやあり方は、これまでかなり議論されていて、もう何か作るとか、どういうコンテンツにするかというのは出駒として出てしまっているのではないかなと思っている。これからは、それをどうやって磨き上げていくかという段階に入っていると思っている。

Society5.0とか、SDGsとかいろいろと言葉が躍っているが、それについて、もう少し真剣に、教育の中に盛り込んでいくことが重要であると思う。それはどういうことかということ、ダイバーシティ教育というのがあるが、そういうものに直接触れるという機会は人だと思う。外国の方であるとか、あるいはハンディキャップを持った方とか、そういう方が教室の中にいるということが非常に重要で、これから10年、20年先になると人口も減り、若い人も減る中で、いろいろな人と一緒に学んだり、またいろいろな人と一緒に働くことになってくる。これはインドとかインドネシアとか、そういう中東や東南アジアの方と一緒に働くことが多くなるということ、いかに自然にそれと出会って、仕事なり、勉強なりができるか、そういう能力を身に付けていくことが必要かと思う。

就職という意味で県内に優秀な高校がたくさんあるが、その高校から、先生方がご指導されて、東京や近畿圏の大学に行く。そうした時に果たして富山に戻ってくるかということ、いろいろな調査の中でほとんど戻ってきてないというのが現実だ。最近少し傾向が変わってきているが、やはり、東京や近畿圏を選ばれる方が多い。優秀な人材がどんどん流出しているというのが今の富山の現状だが、そういった方がきちんと富山に定着するような仕組みづくりを、高校中心に作り上げられないかということは今、提言したいと思っている。

(委員)

先日、日本学校農業クラブ北信越ブロック大会の実践活動発表で審査員をさせていただいたが、その発表を伺うと、SDGsへの取り組みや環境問題、スマート農業など、非常に今日的なテーマを扱って、現代社会の課題を、計画的に考えて解決しようという実践的な取り組みを行っていた。こういう発表を聞いていると、大学側が受け入れる時もこれだけの力があったら素晴らしいと感じた。そういう意味では、

かなり実践的で今日的なことを、職業科においては行われているのではないかという印象も持った。

ただ一方で、中学生が高校へ進学する視点で見ると、特に農業、福祉あたりは、なかなか積極的に選ばないし、中学の段階で将来を見せるということがなかなか難しいと思う。最近、「ミラコン」のようなテレビコマーシャルが流れることによって、工業高校の実態、あるいは何ができるかを紹介しているという現場の先生の話を知った。そういう意味では、職業科だけではないかもしれないが、高校で実際にやられていることをもっとアピールしていくということが、今後必要ではないかと思う。変えていくということももちろん大事だが、まずは現状をもっと知ってもらおうという努力が必要なのではないかと思っている。

今後は、人口減少もあり、小学校、中学校も大変な時期に入っているが、高等学校という立場で、富山県らしい産業や暮らしを支える人材の育成について勉強させていただきたいと思っている。

(委員)

高校生は、働く、自分で生きることを自分で一番考え始める時期だったと思う。私は、高校に行った後、大学に行こうと思っていたので、どの大学かを考える中で、あの時期に先生以外のたくさんの職業人の方と出会うことは、すごく大きなことで、出会いがそのまま学びになると思っている。

先ほど農学を学んだことがないと言ったが、東京で農業と離れて生きること、大学時代、海外に行った時に見た農村の現状から、農業という仕事が、世界でとても通用する、これからも人が向き合っていくべき仕事だと感じて、見識はなかったが、農業に入ろうと思った。農業高校、農業科の高校生に限らず、すべての高校生の生きる力の中に、例えば農業やものづくりを通して、何かを生み出せる能力が自分にもあり得るという可能性を伝えてあげて欲しい。中学生ではおそらく早く、高校生で何か求め始める時に体験できる、そういう富山県の高校での学びがあったらいいと思う。私がそこで何か力になれないかと考えた。

もう一つ、先ほどお話しに出た気づく力について、その通りだと思う。高校教育の目的とは何か、今、何で高校に行って学ぶのか、もしくは高校の先生方は何のために教えるのか、何のために学ぶのか、何のために生きたいのか、何をしたいのかという問が、先生にも生徒にも必要。多分 1 回で出る答えではないと思うので。何のためにこれから学ぶのか、何のために先生方は子ども達に伝えているのか、これをとことん問い続け合える、情熱ある学校生活になればうれしい。ただある仕事を担う、こういう仕事があるから選べるではなくて、それを自分なりに、もしくは新しく作っていける意欲を育てられる高校の学びが、特に富山県であればいいと思っている。

(委員)

今社会においてどんな資質・能力が求められているかということ、自らを内発的に動機づけることができ、また目的・目標を自ら持ってそこから逆算して行動できる

ことだ。自分の強みを生かし、自ら仕事をする目的・目標を掲げてそこに向かって努力できる人材が、これからの先行き不透明な時代、また様々な技術革新、環境変化のある状況の中で求められている。私もサービス小売業では、一人ひとりが会社を代表してお客様や地域社会と接するため、そういう内発的に気づき、自らの目的・目標から逆算できる人材が、これからの社会からは求められると考えている。

特にその目的が、親孝行や恩返しなど迷いのないものであれば、それに向かって自ら成長し、自己研鑽し、職場で自己実現を図ることができる。また働き方改革の中で、仕事以外の時間も充実したものにしていける。そういう「ビジネスはサクセス、プライベートはハピネス」という生き方を、上司や会社から言われるのではなく自ら内発的に持つことができる、そういう資質を持った人材が、きっとこれからの社会を引っ張っていき、国家や社会に貢献し、自ら自己実現、達成、幸せを体感できるのではないかと思っている。

また二つ目の課題として、どのように職業人材が育成されるべきかという点については、どんどん技術は進化していくし、理系文系に関わらず IoT を活用した仕事は必須になってきていて、先ほど ICT 教育の充実という話もあったが、いわゆる IT 人材の育成が急務であり、そういった状況を見据えて、進んで IT を自ら取り入れていく、また仲間や世の中に広めていく、そういうリーダーシップを持った人材が、これからは活躍の機会も増え、社会に求められることになってきている。

理系の志望者が減ってきているという話を伺うが、技術系・IT 系の人材育成、また専門でなくても必要な素養は身に付けて、世界のグローバルビジネスに伍していける人材を育てること、またリーダーシップの育成ということも重要で、様々な学習活動を通じて、主体的、対話的に、また問題解決型、課題解決型のリーダーシップを発揮できる人材、また経験を持った人材を、社会に輩出していただければと思う。

(委員)

求められる資質能力だが、いろいろあるが、課題解決力を挙げたいと思う。進んで課題を見つけ、考えることのできる生徒を育てていかなければいけないと感じている。今まさにコロナ禍の中、児童・生徒なりに、自分の行動はどうあればいいかを考える。大人も考えている。昨日も校長会の折りに、小中学校の校長先生方と話をし、課題解決力の話もしていた。実際、校長も、こういった答えのない課題にぶつかって、どう学校運営をしていくか、今悩んでいる。こういった課題解決力は幼い頃からつけていく必要があるのが、今の時代ではないだろうかと考えている。

自分自身の反省で言えば、高校を選ぶ時に、入れる学校という選び方をしてきた。そうではなく、行きたい学校に入れるようにしてやりたい。つまり、中学生の立場であれば、入れる学校はどこだという点数で選ぶのではなく、いろいろな選択肢がある中で、自分の将来を考え、高校を選択する、考える、そういったことを大事にしていきたいと考えている。そのときに、例えば、今の御三家、富山中部、富山高校、高岡高校。中学校の校長に聞くと、以前の高岡高校には入っていなかった生徒が入っている。もしかしたら、それは親に忖度して入れる学校という選択肢で選ん

だのかもしれない。そうではなくて、本当に自分が将来を考えて行きたい学校であるべきではないかと考える。

富山県の教育は、全国的にも高い評価を受けていると感じている。そこには、これまでも諸先輩方が優秀な人材を育ててきたということもあるし、もちろんそういった資質を持った教員がいたということもあるわけだが、ご存知のように、教員採用試験の倍率が下がっている。従って、初任の時からなかなか厳しい先生もいる。もちろん、教育委員会としてはその先生方を育てようと努力をしているが、できれば、高校から東京の方に行って戻ってこないではなくて、もう少しそういった人材が流出せず、富山県の教育をよりよくしていきたいと思う人が増えるような高校のあり方について配慮いただければ大変ありがたいと思う。

(委員)

子ども達の育てたい力として、OECD Learning Framework 2030 では三つの力を挙げている。一つは、新しい価値を創造する力、二つ目は、対立やジレンマを克服する力、三つ目は、責任にある行動を取る力、この三つを育てたいということである。

この三つの力を育てるには、見通しを持って行動に移す。行動に移すのは自己決定だ。そして、その行動について後から振り返る、これは、この行動が良かったなとか、或いは、もう少しこうすれば良かったということで自己肯定感にも繋がる。或いは、他の人はどうだったかという他者受容にもつながる、このような見通し、行動、振り返りのサイクルを授業や特別活動、学校行事などに入れていって、連続して、そういうサイクルをまわしていくことで、三つの力を育てていきたい。

特に、二つ目、三つ目の対立やジレンマを克服する力については、今までは対立を生まないように、なるべく穏便にという感じだったが、対立或いは、お互い考えが違うということは、もう当たり前であると、それを受け入れて、なおかつ折り合いをつけるという力、或いは、大人にも必要だと思うが責任ある行動を取るという力は大切だ。このような力を中学校だけでなく、高校でも伸ばしていただけるとありがたいと思う。

そして、中学校にとって高校は進学先であるので、どんな高校ということが、より子ども達に分かるようになればいい。各高校ともいろいろな売りがあり、色があり、特色がしっかりとあるのだろうが、それはあまり子どもの方まで伝わらない。もしかしたら中学校の方にも、伝わりきってない部分があるかと思う。学校紹介やパンフレットを集めてみたが、明るくないというか、見て、読みにくい部分があるので、例えば、高校の若い先生方で、或いは高校の生徒も交えて、アピールの仕方を工夫しながら作成することがあってもいいと思っている。

そして今、必要と思うのは、どの高校もその高校に応じた形で構わないが、地域というよりも民間の企業やそういう方々と連携した活動。一緒に働くというよりも、例えば、プレゼンする、一緒に何か開発するというような、一步踏み込んだものやっていたら、それをまた中学校にアピールしていただくと、子ども達も体験したいという気持ちになると思う。

(委員)

これからの時代を生きる子ども達にどのような資質・能力が求められているかというお話だが、多くの委員の方がおっしゃった通り、問題解決能力や問題発見能力というのが非常に重要かと思っている。

またダイバーシティというキーワードもよく出てきたが、多様性が尊重されるような社会に今後、間違いなくなっていくので、これまでの同じような観点の人達が集まってというのではなく、いろいろな方々が集まって、それがプラスに働くようなグループとしての活動を重視して、先につなげていく能力を持った子どもが必要だと思っている。

大学で学生を見ていて感じることは、まずは基礎をしっかりしなければ、その先なかなか伸びないというのがある。もちろん先を広く考えることも大事だが、しっかりとした土台と、その先を伸ばすための両方の視点を入れるような活動や教育をしていただければと思っている。

そういう意味では、座学を受けながら、地元の企業の方々や自治体と地域協動的な活動をすることで、現場の課題と理論を両方学んでいくというのは非常に面白く、大事なことだと思う。実現は難しく課題も多いと思うが、そういった観点からのご検討をしていただければと思っている。

二つ目の地域との連携、地域産業界を支える職業人材の育成といった課題については、多様性のある社会で生きていかなければならないということで、地域協働が出てくると思う。その際に、各高校の特色を上げていくことは非常に重要だと思うが、それぞれを個々の高校でお願いすると、現場が大変かと思う。せっかく富山という産業も、ものづくりも発達し、風光明媚で自然環境もしっかりしている地域の県立高校という枠組みということなので、少し大きな枠組みで、例えば地域協働しようと思った時に、「高岡地区ではこうです」とか、「新川地区ではこうです」というような特色を持ったようなことを地域ごとにうまくやっていただけることを、高校単独というよりは、高校どうしが連携するような形で何かできればいいと思っている。

あとは、教員の先生方は非常に忙しいと思うので、部活動のあり方とか少人数教育のあり方を含め、広い連携の中で、これまでにない難しい業務を認識できるような環境を確保できる対応をいただければと思っている。

(委員)

資料2にあるように、教育を取り巻く環境の変化に順応できるように、考える力、気づく力、或いは、問題解決力などの育成は、持続可能な取り組みとして、教育の内容、充実に取り組んでいくことが常に必要なことだと思っている。また、それを具現化していくことが大切なことなのだろうと思っている。

並行して、実際に現状はどうかという課題を分析するという、それを積み上げていくことも大切なことだと考えている。特に現存している県立高校は43校あるが、学校のスクールポリシーの洗い出しが必要と考えている。新しく中教審を経て、令和4年4月には、学校教育法の施行規則の改正があって、三つの方針というスクールポリシーを策定し、公開することになっている。高校生の学習の意欲を

喚起して、可能性及び能力を最大限に伸ばすための特色であったり、魅力であったり、専門とか普通学科の改革が必要であると、何回か検討会が重ねられている。

新たな時代に対応するためにも、今の少子化であり、グローバル化であるといった社会の趨勢の中で、見直しということが大切ではないか。三つの方針、スクールポリシーの育成であったり、目指す資質能力の育成であったり、教育課程の編成であったり、学校に入学してくる受け入れに関する事項ということが、私立学校も同じことを構築していかなければならない。私学においては、建学の精神を基底に時代のニーズに即した教育の内容の充実、魅力ある、特色ある学校づくりを推進し、中長期において、常に振り返ることが実施されている。

また、公私立高等学校連絡会議において、意見交換を取り入れながら、常にその原因、現況では県外流出者の増加が非常に多く出ている。また、県立高校の入試制度の問題で、年度末の二次募集は、私学に影響を及ぼしているというところから、入学生の実績等を踏まえて検討しなければいけないのではないかという話を、皆さん、課題を主張しながら会議に臨んでいる。

人口減少というのは、生徒数の推移で分かる通り、少子化は今も加速している状態である。令和3年度の中学校卒業予定者数は9,037人。本年度3月は9,000人を割る。10年3月には8,000人も切って、さらに16年3月には7,000人を割り込むような現状にある。

一方、昭和36年の、公立高等学校の適正配置、教職員の定数の標準化等に関する法律というのがあるが、この法律は、公立高校に関しての配置であったり、規模であったり、学級の編成の適正化、それから教職員の定数の確保を図るために必要な条件、条項が定められているが、この第4条の中に、公立高校の配置と規模の適正化に努めなければいけないが、その中でも、私立高校の配置状況等に十分考慮しなければいけないという文言がある。

そこで、新たなる学校における県立高校のあり方というものを考えていくと、学区別における推移というのは、どのような生徒推移になっているのか、また目指していくスクールポリシー、教育目標はどう確立していくのかということ積み上げなければならない。

特に、学校設立当時のスクールポリシー、学校ができた時の考え方がどうだったのかということブラッシュアップしていくということが必要と考えている。学校におけるポジショニングも含めて、どのような学校であって、どのような生徒を育てていくのか。その中で、私学として協調できる学校の融合であったり、伸ばさせる学校の確立であったり、新たなタイプの学校の設置の可能性などを、進学してくる生徒のニーズであったり、学区別の進学者数であったり、そういう社会情勢との摺り合わせをしながら、将来へ向けて模索していく形を取らなければいけないと思う。

最後に、県内の高校教育の発展について私学は一翼を担っている。公私協調ということ捉えながら、生徒一人一人の育成、志望大学への進学者の確保や県内企業への就職者の定着の強化、自己の実現に向けて、求められる人材育成を実践していきたいと思っている。

(委員)

私たちの高校時代は 30 年前になるが、格段に今の学校教育は進行していると思う。今、取り組まれている思考力・判断力・表現力。新学習指導要領が来年から始まると聞いている。まずこちらを進めていただければ、しっかりとした我々が育った世代と全く違った教育が、構築されていくと思っている。

また、今、高校生にも 1 人 1 台端末ということで I T 化がどんどん進んでいる。こちらの方は、後戻りすることなく、ぜひ全面的に進めていただければと思っている。

一番、県立高校のあり方で求めているところでは、これから国際社会の中でグローバル化が非常に大きな問題になってくると思う。グローバル化という中で、子ども達にどういった学校に行きたいのかと聞くと、海外に行きたい、語学を勉強したいのであれば、富山国際大学附属高校に行くのが一番いいという言葉がよく子ども達から聞かれる。

これは県立高校といった中で、やはり非常に寂しい部分もあるので、ぜひそういった意味においては、単位取得の方法や継続性、その後の進学に対する保証、そういったことも取り入れていきながら、国際化に向けた取り組みを、県立学校でももう少し特化してやっていただきたいと思う。

もう 1 点、地域や社会とのつながりという点においては、各学校において進路指導でキャリア教育などに取り組んでいる。しかし、子ども達にとって、社会人で一番身近に感じるのは、やはり両親である。また、自分の家族であるということは否めない。その中で、少しでも地域の人達と子ども達が接する機会を増やしていくことが、今後とも非常に重要であると思っている。

先日、全国 P T A 連合会の島根大会の全国大会があった。その中で、教員が非常に多忙で業務が多いことからコーディネーターの存在というものを聞いている。地域と学校をつなぐ地域コーディネーターというようなものもあるので、ぜひそういったものも取り入れながら、子ども達と社会を結びつける、そういった役割をもっと作ってあげれば良いと思っている。

(委員)

時代のニーズに促し、将来展望に立った県立高校のあり方についてということで少しお話をさせていただく。

「時代のニーズに即し」というところだが、これは社会の変化に対応したということだと考えられる。これからの時代は、これまで中教審答申や学習指導要領の改定の冒頭にも謳われてきているように第 4 次産業革命、或いは Society5.0 といった時代の変化の指摘はもつともであると思う。その中に社会の変化が加速度的である、或いは複雑で予測困難などという言葉で表現されているところだ。私が高校生だった当時もこれからの時代は、混沌とした時代になるというふうに言われた記憶がある。おそらくその当時は、第三次産業革命の到来の頃かと思うが、世の中の技術革新がもたらす社会変化というものは、常に非常に大きく、また、先行き不透明であると、そういったものを必ず伴うものではないかと感じている。こうした中、社会

に巣立っていく高校生は自分が仕事に就くだけではなく、自分たちが新しい仕事を生み出していくというような局面になってくる。まさに、主体的に自分の人生を生きていく、それが求められる時代ではないかと感じている。

そうした世の中に、これから巣立っていく高校生のうちに、育むべき資質や能力とは何かと問われると、これまで指摘されているものと大きく変化するものではないという気持ちだ。いろいろ取り上げられる言葉は変わるが、読解力、論理的思考力をはじめとする基礎学力がみんなに等しくきちんと育まれていくことが重要だと考える。

またコミュニケーション能力。これは他と協働していく、自分の意見を他と交わしていくことや、共に何かを成し遂げていく、そういった協働していく能力も、非常に大切だと思う。また、新しいこういった時代を前向きに生きていく、社会に対して適応していくという力も必要だと思う。

もう一つあえて言えば、今、多様な人たちと接する機会が多くなった。その人たちと、お互いに尊重し合い、他者と共存共栄を図っていく社会の担い手になることも大事なことはないかと思う。こうした力を身につけるものは、授業はもとより、学校行事や、様々なものが、それぞれの役割を果たしてくれるのではないかと思っている。

高校のあり方を考えてみると、やはり学びというものが非常に大切だと思う。これは高校に限らず、もともと子ども達は様々な好奇心、向学心を持っている。それをうまく授業など、いろいろなところで繋ぎ、新しいことを知ると、またそれよりも増してたくさんの議論が起きていく。こういった学びを学校で実践できるようにしたい。教員は、生徒の好奇心や向上心に火をつけることが、仕事だと思う。

本県では、学習指導要領先取りで、主体的・対話的で深い学びの実践をずっとここ数年やってきている、こうした学びの姿勢も非常に大切だと思う。この学びの様子は、10年、15年前と比べ随分、大きな変化だと思っている。教員の質問に生徒一人一人が答えるだけでなく、生徒同士で考えて、場合によってはそれをまとめて発表する。すなわち生徒が授業中に自分の考えたことを言葉に発するということが極めて重要なことだ。こうした授業を行うためには、教員の教材に対する深い理解が必要で、職員の不断の教材研究が求められていると思う。

最後に、高校を卒業してからのUターンの話だが、高校では県教委の事業で、普通科を対象に、県内の企業を訪問するという機会がある。一人あたり2、3社程度だが、富山県の会社を実際に見学させていただいている。これは生徒にとって、驚きの発見があるというような状況で、付き添う先生もこういった会社があることを再認識するいい機会になっていると思う。

(委員)

このあり方検討委員会の目指すべきところを皆さんと確認しなければいけないのではないかと思う。本来、これからの教育を語る上で、現状、何が課題になっていて、何が問題なのかっていうことを、明らかにして、それに対してどうアプローチしていくかというのが、この検討委員会の進め方ではないかと思っている。

ところが理想の教育像というのが、どこにも明確に定義がされていない。何が課題なのかも分からなくなっている現状の中で、県立高校のあり方をマイナーチェンジとして捉えていくのか、それとも、フルモデルチェンジに近い形でこのあり方を運用していくのかということが、課題になっていく。それを考える上で、大事になってくることは高校の存在意義だろうと思う。

当然、第一は子ども達だ。子ども達にとって高校はどうあるべきか。それからもう一つは、国家 100 年の計としての教育という制度の中での高校の位置づけだ。そして最後は、地域、県の教育委員会も含めた、その設立母体になっているところの高校という三つの側面があるように思う。この三つから議論をしていかなければならないと思っている。

高等学校というのは、小中学校とは違う。義務教育は学ばなければいけないが、高校というところは、学びに行く場所であり、高校の位置づけは非常に大きいと思っている。

そこで、影響を与えるのは単線型の日本の教育制度だろうと思っている。単線型の教育制度で、どこまで目指していくのか、これも明らかになっていない。それを考える高校の入口である中学校、そして、高校の出口である高等教育機関とのシームレスな連携というのも課題として挙がってくる。これが、ざっと捉えた高校の位置づけだと思う。

それに加えて、ここにも書いてある Society5.0 の時代をどう生きるかということだが、これは平成 30 年に林芳正大臣がつくられた「Society5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会」の答申が「Society5.0 に向けた人材育成」ということで平成 30 年 6 月に出ている。今後の Society5.0 の時代にどのような人材、力が必要かというのは、これをベースに議論されれば良い。

中教審答申が出たが、その策定のためのワーキンググループの委員を務めたのだが、その中でスクールポリシーの策定がこれから求められてくる。このスクールポリシーを誰が作るのかというと、答申の中では、校長をはじめとして教職員が一丸となって考えなさいと書いてあるが、教員は、授業のプロではあるが、マネジメントのプロではない。そういった方々が急に、こういったことを作れるか、その PDCA を回していけるかということ、次は教員の資質の問題が大きいので、こちらも大きく取り組んでいかななくてはならない課題になっていくのではないかとと思っている。

(委員)

私は高校時代に畜産を選び、生き物を扱った体験をした。生き物を扱って育てるという高校時代の体験は、すごく今の自分の人生や仕事など、いろいろな面で、すごく生かされていると思っている。

そういった意味で保護者の方の意見の中から一つ、まず、中学校では 14 歳の挑戦、高校では 17 歳の挑戦という事業が行われている。子ども達が県内の企業を理解して、興味を持つことで、将来を見据えて高校や大学への進学を選択するきっかけとなっている。とても素晴らしいことだと思う。こういった県内企業の見学、実施体験や就労体験等々をして実施している高校がもっと増えるといい。

ただ、現在17歳のお子さんを持つ保護者の方の話だが、コロナ禍ということもあり、17歳の挑戦は良いことだが、その説明が保護者にしても子ども達にしても、説明不足だと感じたようだ。何のための17歳の挑戦なのかをしっかりと、先生の方から、生徒、保護者に伝えていただき、この素晴らしいキャリア教育の充実のために、企業、学校、家庭の連携協力により、一層強化を図る提案をしたい。

二つ目は、小中高校で、特別支援を要する児童生徒が急増している中、その生徒のケア不足から、ついていけない生徒、辞めていく生徒が増えているようだ。そういった児童生徒を専門に支援してもらえる人材を高校の方に入れていただきたいと思う。希望なのか要望なのかよく分からないが、例えば、自分が思うような高校に入学したが、思うような高校ではなかった場合、その生徒に合った他の高校に変われるようなシステムを作ってもらい、その高校生がしっかり見合った高校で勉強して、次に進めるように支援して欲しい、そういった声もあった。

17歳の挑戦に関しては、学校の意見とすれば、実際に企業見学したことで、県内の企業に対する理解が深まった。自校のOBや若手社員の方からお話を聞くことで、近い将来を具体的にイメージできた。進学先としての大学だけでなく、その後に繋がる職業を意識して、将来を思い描く機会となった。担当者へ積極的に質問するなど、企業への関心の高さが感じられた。将来は働きやすく暮らしやすい富山で就職したいとの感想も多く見られた。という意見があった。

こういった意見を聞くと、先ほど皆さんが言われていたような、Uターン就職とか、そういったことにもつながっていくと感じた。

(委員長)

高校への進学率が98%を超えていたと思う。また、大学、短大への進学率が50%、多くの方が、また専門学校へ行かれるということで言えば、こういう委員会を設けて検討されるのが高等学校だけ、今回は県立高校という枠組みで考えがちだと思うが、現実にはその中で、県立高校の職業科の話もそうだが、どの程度の方が高校を最後に就職するのか。そのパーセンテージはどれくらいなのかという実数をもとに議論していかないと、多くの方が大学・短大・専門学校へ進むので、それを前提としたカリキュラム、考え方にしていけないといけない。

また皆様からのご指摘もあったとおり、今現在、18歳に国政への参政権が下がってきている。高校卒業イコールすぐに国政選挙において選挙権を持つということで、もっと広く社会との接点を義務教育から高校の間にもって行くという、大変多様な役割を担わせるのが現在の高校ではないかなと思う。社会の矛盾や社会の進歩など様々な問題のある中で、すべてを高校に押し付ける。この中にすべて盛り込もうというのは、ほとんど不可能ではないかと思う。理想論は理想論として、現実問題、どういう方法を考えていくのか。そのベースとなるのは、今ほど申し上げた、実際富山県の県立高校を卒業して、すぐ就職される方はどの程度の割合になるのか、進学される方はどれくらいいるのかということ。また小中義務教育、高校、大学、短大、専門学校との連携の中で、どういう位置づけとして捉えていくかという議論が発散しない意味でも重要である。

(委員長)

本日、欠席のお二方からも、ご意見をいただいている。

(事務局)

以下読み上げ

(委員)

創造性や持続可能性などが求められるこれからの時代にあっては、子ども達に限らず、私たちには、課題解決のための論理的な思考や創造性、持続可能な解決に向けた幅広い視点、さらには、困難を乗り越える力などを養うことが必要であり、そのため、学校教育においても、課題解決型の探究的な学習活動を積極的に取り入れ、充実させていくことが大切だと考える。課題解決に向けた取り組みの中で、物事を筋道立てて考え、文章などに表現し、論述するなどの力が身についていく。

今は各県立高校においてそうした学習の成果を校内や高校生を対象としたイベントで発表し評価し合う機会が設けられているところだが、将来的には例えば行政機関や地域に向けた提言を行うことなどを目標として、高校生も積極的にまちづくりに関わっていくような、取り組みへと進化させても良いのではないか。

そうすれば地域との連携や地域を支える人材育成にも結びついていくのではないか。また、課題解決型の探究的な学習を進めていくにあたっては、例えば、近くの学校、学校の普通科、職業科、工業科の生徒が一つのチームを組んで、それぞれの得意とする場合を生かしながらプロジェクトを進めていくようなやり方もあるのではないか。少子化が進む中、地区内の複数の高校がワイドに連携し合う取り組みもあってもよいのではないか。地区によっては中高の連携を組み込み、さらに特色化を図ることができるように思う。

(委員)

幅広い業種・幅広いキャリアの先輩社会人と学生が相互にコミュニケーションをとることができる学びの場が必要だと思う。生き方や考え方に共感し、将来、この人のようになりたいと学生が考える場だ。

弊社は産業観光に取り組む中で、修学旅行生や県内の学校さんの授業などで、伝統産業や、取り組みについてお話させていただく機会を多くいただいている。その経験の中で、例えば小中学生はまず伝統や鑄物に興味を持ってもらうことを一端のゴールとしており、興味関心を引くためのコンテンツを取り入れ、得られる反応も学生さんの表情などから伝わり、とてもわかりやすい。比較するわけではないが、高校生は、自分自身もそうだったが周りの目が気になる年頃で、大きく反応したり、人に質問をしたりすることが恥ずかしく、感情が表面に出しづらいところもあると思う。そのため、どうしても話が一方通行となってしまう、学生さんに何を得ていただいたのか、私どもはどう学びの役に立てたのかかわからず、不完全燃焼の思いになることが多い。私たちも大人として企業人として、高校生に伝えたいのは、社会人としての思いだ。それがきちんと伝われば、学生さんにとって将来の糧となり、

この人のような生き方をしたい、この人はこう言っていたなど、鮮明に記憶に残り、Uターンで富山に戻る人口も増えるのではないかと思う。そのためには一方通行の企業人の講演のような形ではなく、しっかりと、例えば地域が抱える課題や企業が抱える問題について、企業人と一緒になって解決に取り組むカリキュラムなど、企業人と学生さんが同じ目標に向かって答えを探すような育成事業を広く取り入れていくことが重要だと思う。弊社に例えるならば、共にスズの新たなジャンルの製品を形にするや、旅行客に富山の魅力を伝えるパンフレットを作成する。カフェで、高校生の意見を用いたメニューを開発するなどを通し独創的な考えや、幅広い感性を持つ大人への成長の役に立てるのではないかと思う。

コロナウイルスの感染拡大により、オンライン化が進んでいる。オフラインだと負担がかかるが、オンラインを導入することで、より企業人や地域と学生さんが繋がりやすい時代だと思う。企業にももちろん負担はかかるので、継続的に無理なく実施できるような支援をいただければ、学生の新たな知見を得られる企業にとってのメリットも十分に感じられる。

(委員長)

皆様のご発言を聞いての感想を申し上げる。問題発見、問題解決能力を培ってほしいというご意見が多数あったと思う。これもまさにその通りだが、日本はOECD先進諸国の中では残念ながら自殺率が高い国として知られている。そして10代、20代の死亡原因第一位が、これも誠に残念だが、自殺ではなかったかと思う。

ということは、いろいろ問題発見、問題解決能力を培ったとしても、社会全体があまりに閉塞感が強いのではないか。ようやくデジタル庁をつくるとか、1人1台の端末環境が整ってきているが、そういったものを本当に有効活用していく、社会のあり方を変えていこうという動きが社会全体にあるのかどうか。それが足りないが故に若者たちが絶望してしまう、というような社会になっている。そういう反省も踏まえて、高校生に何を求めていくか、我々が何を提供できるかということを議論していただければと思う。

5 閉会

14時45分、議事が終了したので、委員長が終了を宣し、事務局へ進行を戻した。その後、司会が閉会を宣した。